

研究拠点形成事業
平成 28 年度 実施報告書
(平成 25～27 年度採択課題用)

A. 先端拠点形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	北海道大学アイヌ・先住民研究センター
(カナダ) 拠点機関：	アルバータ大学
(連合王国) 拠点機関：	アバディーン大学

2. 研究交流課題名

(和文)： 北方圏における人類生態史総合研究拠点

(交流分野：考古学、人類学、生物学、環境科学)

(英文)：Advanced Core Research Center for the History of Human Ecology in the North

(交流分野：Archaeology, Anthropology, Biology, Environmental Science)

研究交流課題に係るホームページ：<http://nt.caais.hokudai.ac.jp>

3. 採用期間

平成 25 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日

(4 年度目)

4. 実施体制**日本側実施組織**

拠点機関：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：アイヌ・先住民研究センター・センター長・
常本照樹

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：アイヌ・先住民研究センター・教授・
加藤博文

協力機関：琉球大学大学院医学研究科、東京大学総合研究博物館

事務組織：北海道大学国際部国際連携課、文学部事務部

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：カナダ

拠点機関：(英文) University of Alberta

(和文) アルバータ大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名) : (英文) Department of Anthropology, Professor,
Andrzej WEBER

協力機関 : (英文) なし

(和文) なし

経費負担区分 (A型) : パターン2

(2) 国名 : 連合王国

拠点機関 : (英文) University of Aberdeen

(和文) アバディーン大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名) : (英文) Department of Archaeology, Senior
Lecturer, Rick KNECHT

協力機関 : (英文) Oxford Centre for Asian Archaeology, Art and Culture, School of
Archaeology, University of Oxford.

(和文) オックスフォード大学考古学系オックスフォードアジア考古学・芸術・
文化センター

経費負担区分 (A型) : パターン1

5. 研究交流目標

5-1. 全期間を通じた研究交流目標

人類は、生理学的に熱帯型の生物であるにも関わらず、既に4万年前には北緯70度の北極圏にまで到達した。その動きは解剖学的現代人の出現と拡散の動きと連動する。250万年間のホモ属の人類史において農耕出現以降の歴史は、わずか1万間に過ぎず、その大半は狩猟採集民の歴史であった。狩猟採集民社会の人類史の解明は、すなわち我々現代人の進化的位置付けを解明することになる。しかし、従来人類史は中緯度の国家史・文明史中心の叙述であり、狩猟採集社会は、その初源的生活様式としての位置付けにあまじってきた。

北海道大学を中心とした研究チームでは、2011年からアルバータ大学、アバディーン大学などとの間で北方圏に展開する狩猟採集民社会の環境適応行動の特性とその独自の歴史の変遷過程を解明する目的で考古学、古環境学、分子生物学、人類学などの領域横断型のプロジェクトを組織、スタートさせた。本事業では、北方圏の狩猟採集民の人類史の中でも、北海道島周辺の変動する自然環境とその中で営まれた人類環境史の独自性と多様性を解明していく。本研究の中核には北海道をフィールドとした複数国の研究者、若手研究者が参加する国際フィールドスクールを企画実施し、中核的研究拠点の役割を果たす3大学の施設を活用し、単独の大学機関ではカバーできない研究手法や研修制度を国際共同として実施していく。特に1) 国際フィールドスクールでは、異領域の研究手法の統合と研修機会の提供、研究者交流の場を提供する。2) 国際セミナーにおいては、最先端の調査研

究手法と研究機材の使用方法の習得の機会を提供する。3) これら国際共同研究を通じて、若手研究者の研究機関を超えた指導体制、共同研究の枠組みを構築する。

5-2. 平成28年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

これまでの研究交流によって確立されてきたカナダと連合王国の大学間との共同研究、共同セミナー、研究者交流に加えて、平成27年度に連携が拡大したフローニンゲン大学（オランダ）、ウプサラ大学（スウェーデン）、ヘルシンキ大学（フィンランド）を巻き込んだ共同研究構想、研究者交流、若手研究者の相互派遣のプログラムを構築していく。すでに我々の拠点が北米と北ヨーロッパで継続して開催してきている共同セミナーや、礼文島での国際フィールドスクールについては、各地での周知が高まってきており、特に礼文島での国際フィールドスクールは、北米から欧州の若手研究者が交流し、研究情報を共有する有効な場としての役割を果たしつつある。

平成28年度の研究体制の構築と関連する主な事業は以下のものを計画している。

- (1) ブリテッシュ・コロンビア大学（カナダ）での北方圏の人類史および先住民族文化遺産に関する共同教育プログラムの開始と相互の大学交流協定を基礎とした短期的研究者交流の展開
- (2) フローニンゲン大学（オランダ）との大学間交流協定の締結に向けての作業
- (3) ウプサラ大学（スウェーデン）との大学間交流協定の締結に向けての作業
- (4) オックスフォード大学での自然人類学に関する共同セミナーの開催
- (5) 北海道大学の learning satellite 構想と連携したオックスフォード大学との教員交流プログラムの実施
- (6) 世界展開力強化事業（ロシアとの交流）と連携した極東連邦大学及び北東連邦大学（以上ロシア）との共同研究計画の準備と本事業メンバー（日・加・英）との交流事業についての研究打ち合わせの実施

<学術的観点>

引き続き、共同セミナーを通じて比較検討してきた検討課題である（1）集団移動と拡散、（2）海洋適応、（3）先住性の各項目のとりまとめを進める。国際雑誌への共同論文の投稿以外にも英文での報告書の刊行や、一般書籍の刊行を目指す。具体的には以下の項目を予定している。

- (1) 国際会議での研究成果の発信では、8月末に京都で開催される世界考古学会議（World Archaeological Congress-8 in Kyoto）での基調講演への参加、セッションの立ち上げに取り組む。またポストカンファレンス・エクスカージョンとして北海道エクスカージョンを企画実施する。
- (2) 若手研究者の国際雑誌への投稿、国際学会での報告を集中的に支援する。
- (3) 礼文国際フィールドスクールで調査を蓄積してきた礼文島の人類遺跡と環境気候変動に関するレポートを英文で刊行する。

- (4) 参加研究者の講義映像、研究トピックスのインタビューのデジタル映像を収録し、プロジェクトホームページを通じて発信する。

<若手研究者育成>

- (1) 平成27年度に実施した北海道大学の外国人招へい教員の枠を活用した海外の若手研究者を特任助教とした雇用制度を、平成28年度も引き続き活用し、日本側参加研究者との間での共同研究および大学院生向けの講義を実施する。
- (2) 平成28年度4月に英語圏との交流強化のために任期付き（5年）の助教枠で若手研究者を採用する。
- (3) フローニンゲン大学（オランダ）と連携してEU財源によるPhDプログラムをスタートさせる（10月1日スタート）。募集される枠の一つは、‘Bringing Home Animals – Ainu and Okhotsk Culture food technologies’である。日本側コーディネーターの加藤が選考委員に加わる（<http://www.archsci2020.eu/>）。
- (4) 平成28年度は、若手研究者育成の独立したプログラムをスタートさせる。具体的には、海外の研究者の指導を受けながら、連携研究機関で研究活動を行うための中長期派遣1名、短期派遣2名の募集を行う。
- (5) 海外の若手研究者を中核とした先住民考古学研究コンソーシアムの構築

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

- (1) 平成27年度に引き続き、新聞社などが企画する市民講座と連携したプロジェクトメンバーによる公開講座を4月から7月にかけて実施する。
- (2) 「国民との科学・技術の対話」事業に参画し、海外の教員もまじえた高校生向けの講義提供を実施する。
- (3) 北海道アイヌ協会や北欧のサーミ議会、北米北西海岸の先住民コミュニティが主宰するシンポジウムに積極的に連携し、研究成果の共有を図る。また先住民の若手研究者の育成に関する共同プログラムをブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）やアバディーン大学・オックスフォード大学（連合王国）と連携して構築していく。
- (4) 国や北海道が進めているアイヌ民族の先住民文化遺産の保存と管理に関する検討作業に協力し、蓄積された研究成果をより良い政策提言の資料として提供していく。

6. 平成28年度研究交流成果

（交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。）

6-1 研究協力体制の構築状況

平成28年度までの研究交流によって確立されたカナダと連合王国の大学間との間の共同研究、共同セミナー、研究者交流に加えて、フローニンゲン大学（オランダ）、ウプサラ大学（スウェーデン）、ヘルシンキ大学（フィンランド）との交流を実施し、今後の共同研究構想、研究者交流、若手研究者の相互派遣のプログラムの構築を進めた。平成28年度に実施した共同セミナーについては、海外の研究機関や研究者から、その効果について高い評

価を得ることができた。礼文島で実施してきた国際フィールドスクールについては、海外で広く認知されるようになり、昨年度は海外から26名の学生の参加があり、若手研究者が交流し、研究情報を共有する有効な場としての役割を果たしている。

平成28年度に計画した以下の事業の目標達成状況は以下のようになる。

- (1) ブリテッシュ・コロンビア大学（カナダ）での北方圏の人類史および先住民族文化遺産に関する共同教育プログラムについては、平成29年3月に教員を2名派遣（財源は、本学の総長裁量経費）し、短期的研究者交流については平成28年10月に実施した。派遣人数は2名で派遣期間は3週間である（財源は、本学の総長裁量経費）。
- (2) フローニンゲン大学（オランダ）との大学間交流協定の締結に向けての作業については、全学レベルの協定には学内調整に時間を要するため、北海道大学アイヌ・先住民研究センターとフローニンゲン大学北極研究センターとの間の部局間交流協定を締結することに平成28年2月に合意し、最終的な調印手続きを進めている。
- (3) ウプサラ大学（スウェーデン）との大学間交流協定の締結に向けての作業については、目下調整中であり、平成29年度中の締結を目指している。
- (4) オックスフォード大学での自然人類学に関する共同セミナーについては、平成29年1月に開催した。
- (5) 北海道大学の learning satellite 構想と連携したオックスフォード大学との教員交流プログラムの実施については、平成29年3月に実施した。教員2名を派遣した財源は、本学の国際交流経費による。
- (6) 世界展開力強化事業（ロシアとの交流）と連携した極東連邦大学及び北東連邦大学（以上ロシア）との共同研究計画の準備と本事業メンバー（日・加・英）との交流事業についての研究打ち合わせについては、極東連邦大学とオックスフォード大学の研究者を交えて、ユーラシア大陸域の集団移動と完新世の狩猟採集民社会の独自性についての共同研究を協議し、共同研究助成を申請中である。

6-2 学術面の成果

平成28年度は、共同セミナーを通じて比較検討してきた課題である、(1)集団移動と拡散、(2)海洋適応、(3)先住性の各項目のとりまとめを進め、国際雑誌への共同論文の投稿、英文での報告書、一般書籍の刊行を計画した。各項目の実施状況は以下の通りである。

- (1) 国際会議での研究成果の発信については、8月末に京都で開催された世界考古学会議（World Archaeological Congress-8 in Kyoto）の基調講演への参加、セッションを立ち上げ報告を行った。またポストカンファレンス・エクスカージョンを企画し、海外からの参加研究者に地域的特性の解説を行った。エクスカージョンには、アメリカ考古学会会長をはじめ南北アメリカの研究者、ヨーロッパやインドからの参加者があった。
- (2) 若手研究者の国際雑誌への投稿としては、プロジェクトに参加している研究者3名の4本の論文が掲載された。それぞれ本事業のセミナーの一つである礼文島での国

際フィールドスクールで得られた資料に基づくものであり、1本は、調査地点に隣接する湖から採取した湖底堆積物のボーリングコアから得られた土壌サンプルと花粉・孢子サンプルに基づいた古環境・古気候復元について、別の1本は、調査地点である浜中2遺跡の堆積層から得られた栽培植物（大麦の種子）の系統と渡来ルートについて、もう1本は、浜中2遺跡から得られた動物遺存体から得られた安定同位体分析による家畜の食性復元についての論文である。最後の1本は、安定同位体からみた幼児の離乳時期について考察した論考である。また国際学会での報告として8月に京都で開催された第8回世界考古学会議において若手2名が報告を行っている。

- (3) 礼文島の人類遺跡と環境気候変動に関するレポートについては、3本の共同論文が英文雑誌に掲載された。
- (4) 参加研究者の講義映像については、6名の報告が、研究トピックスのインタビューのデジタル映像については2本が収録され、プロジェクトホームページ上において公開されている。

6-3 若手研究者育成

- (1) 北海道大学の外国人招へい教員の枠を活用した海外の若手研究者を特任助教とした雇用制度の利用は、平成28年度について調整にとまどり実施にいたらなかった。
- (2) 英語圏との交流強化のための任期付き（5年）の若手教員の雇用については、平成28年4月1日付けでアラスカの狩猟採集民社会を研究する研究者を助教枠でセンター専任教員として採用した。（北海道大学の経費で採用）
- (3) フローニンゲン大学（オランダ）と連携してEU財源によるPhDプログラムをスタートさせた。‘Bringing Home Animals – Ainu and Okhotsk Culture food technologies’をテーマにフィンランド出身の研究者が採用され、日本側コーディネーターの加藤が選考委員として参加し（<http://www.archsci2020.eu/>）、論文指導委員となった。
- (4) 平成28年度に若手研究者育成の独立したプログラムをスタートさせた。中長期派遣1名、短期派遣2名の募集を行い、中長期派遣（1ヶ月）1名、短期派遣（2週間）1名を採用し、派遣旅費を支援した。
- (5) 海外の若手研究者を中核とした先住民考古学研究コンソーシアムとしては、平成29年度の礼文島での先住民考古学のワークショップを企画するグループをオックスフォード大学のPD研究員をリーダーに組織した。

6-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

- (1) プロジェクトメンバーによる公開講座を新聞社が企画する市民講座と連携し、平成28年4月から7月にかけて実施した。
- (2) 「国民との科学・技術の対話」事業に参画し、平成28年10月20日に札幌北高校において高校生向けの講義を提供した。

- (3) 先住民族団体との研究成果の共有を目的とした連携としては、北海道アイヌ協会と連携し、日本考古学協会と日本人類学会の協力を得て、これまでのアイヌ民族に関連する研究成果を発信するシンポジウムを平成28年11月に実施した。また先住民の若手研究者の育成に関する共同プログラムをブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）と連携して平成29年3月にバンクーバーにおいて実施する。
- (4) 国や北海道が進めているアイヌ民族の先住民文化遺産の保存と管理に関する検討作業への協力としては、北海道アイヌ協会、日本人類学会、日本考古学協会と連携したラウンドテーブルを組織し、平成28年12月に中間報告を、平成29年3月には最終報告書をまとめ、平成29年4月に内閣官房のアイヌ政策会議に報告・提言する予定である。

6-5 今後の課題・問題点

これまで本事業の取り組みにおける課題点としては、以下の2点を提示し、改善に取り組んできた。

- 1) 研究交流の双方向性の課題
- 2) 研究者の研究機関移動に伴う連携機関の拡大

1) の課題については、交流の中核となる礼文島でのフィールドスクールにおいて、カナダ側と連合王国側の若手研究者の交流、共同作業の取り組みを設定することで課題解決に取り組んでいる。引き続き、若手研究者が主体的に取り組めるプログラム開発をプロジェクトとして支援することでより一掃、双方向の交流が活発化するように努力していく計画である。

2) の課題については、連携機関の拡大と国を超えた若手研究者の流動というプラス効果が表れている。平成28年度も礼文島での国際フィールドスクールは、カナダと連合王国、さらに第3国の大学院生や若手研究者が数多く参加する安定した国際的な研究教育交流の場となっており、参加者と参加大学数が拡大する傾向を示している。本事業も後半に計画期間の後半に入り、共著論文など共同研究の成果、研究交流の成果が出始めている。

6-6 本研究交流事業により発表された論文等

- | | |
|-------------------------------|-----|
| (1) 平成28年度に学術雑誌等に発表した論文・著書 | 16本 |
| うち、相手国参加研究者との共著 | 5本 |
| (2) 平成28年度の国際会議における発表 | 22件 |
| うち、相手国参加研究者との共同発表 | 1件 |
| (3) 平成28年度の国内学会・シンポジウム等における発表 | 10件 |
| うち、相手国参加研究者との共同発表 | 0件 |

(※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)

(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

7. 平成28年度研究交流実績状況

7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成25年度	研究終了年度	平成29年度
研究課題名		(和文) 北方圏における人類文化・環境適応・景観創造			
		(英文) Human Culture, Adaptation, modified Landscape in the North			
日本側代表者 氏名・所属・職		(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授			
		(英文) KATO Hirofumi・Center for Ainu & Indigenous Studies・Professor			
相手国側代表者 氏名・所属・職		(英文) (1) WEBER, Andrzej・Department of Anthropology・University of Alberta・Professor (2) KNECHT, Rick・Department of Archaeology・University of Aberdeen・Senior Lecturer			
28年度の研究交流活動		28年度の研究交流活動として以下の取り組みが行われた。 1) シベリア大陸内部の狩猟採集民社会と太平洋沿岸の狩猟採集民社会の比較研究を目的とした連合王国や北欧諸国の中核研究機関とロシア圏の大学研究機関を融合する取り組みとして、オックスフォード大学(連合王国)と極東連邦大学(ロシア)やイルクーツク国立大学との共同研究の枠組みを協議した。2) 北方圏の人類集団における家畜飼育伝統の歴史人類学的検証については、共に中世温暖期に活発な移住拡散行動をとったことが知られている北欧におけるヴァイキング集団の家畜飼育と極東アジアのオホーツク文化の家畜飼育について比較考察をウプサラ大学の研究者との間で進めた。 3) 海洋適応と集団移動と拡散に関する理論考古学的研究 4) 北大・フィンランド共同シンポジウムや、北極域研究事業と連携した、北方圏の文化遺産や文化景観に関するシンポジウムやセミナーを通じた共通課題の整理と具体的な研究プログラムの展開。 5) 世界考古学会議京都大会(World Archaeological Congress-8 in Kyoto)でのセッション報告と討論			
28年度の研究交流活動から得られた成果		28年度の取り組みによって北方圏の人類社会の文化的多様性を示す具体的な事例が蓄積された。28年度の研究交流活動によって期待された成果には以下のものが挙げられる。 1) ユーラシア大陸の先史狩猟採集民社会の国際比較研究を目的とした連合王国や北欧諸国の中核研究機関とロシア圏の大学研究機関を融合する取り組みとして、オックスフォード大学(連合王国)と極東連邦大学(ロシア)やイルクーツク国立大学との共同研究の枠組みを構築することができた。平成29年5月には極東連邦大学においてオックスフォード大学の共同研究者と日本側研究者がロシア側機関と共同研究の具体的ロードマップを作成し、共同研究を開始する予定で			

	<p>ある。</p> <p>2) 本事業のワークショップを通じて北方圏の人類集団において、とりわけ中世温暖期に展開した北欧におけるヴァイキング集団と極東アジアのオホーツク文化時期にイヌとブタという共通した家畜飼育伝統を持つことが確認された。共にこの家畜飼育伝統が両集団の広域での移住行動を可能としたことが推定された。</p> <p>3) 北大・フィンランド共同シンポジウムに参加し、ヘルシンキ大学との間でワークショップを開催することで、北方圏の文化遺産や文化景観についての共通課題の整理と先住民研究の領域での具体的な研究プログラムの展開の可能性が確認された。</p> <p>4) 世界考古学会議京都大会 (World Archaeological Congress-8 in Kyoto) で先住民考古学のセッションと、北海道の人類文化を考察するセッションを研究事業メンバーの参加を得て実施した。86 カ国から参加した 1800 人の参加者に対して事業成果の一部と課題を提示することができた。</p>
--	--

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 25 年度	研究終了年度	平成 29 年度
研究課題名	(和文) 北方人類史研究における先住民文化資源の過去と未来				
	(英文) Past and Future on Indigenous Cultural Properties for the Human History in the North.				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授				
	(英文) KATO Hirofumi, Center for Ainu & Indigenous Studies, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) (1) GOSDEN, Chris, Institute of Archaeology, University of Oxford, Professor (2) ROWLEY, Susan, Department of Anthropology, University of British Columbia, Associate Professor				

<p>28年度の研究交流活動</p>	<p>28年度の研究交流活動として以下の取り組みが行われた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) オックスフォード大学ピットリバーズ博物館と大英博物館を中心に連合王国内に収蔵されているアイヌコレクションなど先住民族の文化資源の収集経緯、コレクション特性の比較考察をアイヌ工芸家の参加を得ながら行った。その結果として、本共同事業に参加しているアイヌ工芸家の木彫の作品が大英博物館の資料収集委員会において評価される結果に結びついた。平成29年度に進められている日本文化展の展示コーナーのリニューアルでは、この工芸家の作品が展示されることが決まった。先住民アートの実践者と博物館との連携関係の構築大きく寄与することができた。 2) 先住民族が博物館コレクションにアクセスするためのフレームづくりをコミュニティ考古学の視座から実施した。文化遺産の知的財産権（所有権）問題についての国際共同研究を開始し、当該問題が保有する多様な背景についての理解を深めることができた。 3) 先住性概念をふくむ先住民考古学の理論考古学の国際共同研究に取り組んだ。オックスフォード大学の考古学研究所との間で先住性に係る論集をまとめることを協議した。 4) 北海道大学が進める修士課程の大学院生向け国際共同夏季教育プログラム（Summer Institute）と連携したプロジェクトメンバーによる研究成果を含めた講義をオックスフォード大学とブリティッシュ・コロンビア大学で平成29年3月に実施した。
<p>28年度の研究交流活動から得られた成果</p>	<p>28年度の研究交流活動によって以下の成果が得られた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 先住民社会への自らの文化資源へのアクセス機会の提供としては、オックスフォード大学のピット・リバーズ博物館との間でアイヌコレクションの共同調査を進める一方で、大英博物館に所蔵されるアイヌコレクションについても共同調査が可能となった。また平成30年度に予定されている大英博物館の日本文化展示コーナーの改装に合わせて本事業に参加協力してきたアイヌ工芸家の作品が展示されることとなった。本成果は、プロジェクトが橋渡しとなり研究機関と先住民族コミュニティ協業の機会創出の良い事例となる。 2) 異なる先住性概念の国際比較を目的とした論集の作成をオックスフォード大学の研究者との間で作成することが決まった。 3) 先住民考古学と先住民文化遺産という相対的に新しい研究領域に関する国際ネットワークの構築をオックスフォード大学（連合王国）、ウプサラ大学（スウェーデン）、ヘルシンキ大学（フィンランド）、ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）との間で合意することができた。またこの枠組みにおいて博士課程や若手研究者の参画支援を行った。この取り組みは、複数の研究機関が連携した拠点移動に

	<p>よる複合指導体制での若手研究者育成の具体的な取り組みの成果として、挙げるができる。</p>
--	--

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	<p>日本学術振興会研究拠点形成事業「礼文島国際フィールドスクール」</p> <p>(英文) JSPS Core-to-Core Program “International Field School in Rebun Island “</p>
開催期間	平成28年 8月1日 ～ 平成28年 8月21日 (21日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	<p>(和文) 日本国、北海道礼文町、浜中遺跡群</p> <p>(英文) Hamanaka site complex, Rebun, Hokkaido, Japan</p>
日本側開催責任者 氏名・所属・職	<p>(和文) 長沼正樹・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・准教授</p> <p>(英文) NAGANUMA Masaki, Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University, Associate Professor</p>
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文)

参加者数

セミナー開催の目的	<p>1) 歴史文化遺産の複合性を理解する。</p> <p>2) 考古遺跡が過去の環境情報や人類と動植物など生態系との相互作用が累積した結果、形成されたものであることを実践的に学ぶ機会を提供する。</p> <p>3) 遺跡に良好に保存された各種データを効率的に収集し、高精度の調査機器により遺跡情報を包括的に記録する手法を学ぶ。</p> <p>4) カナダと連合王国、そして日本を主体とする多領域の研究者による最新知見について野外レクチャーを通じて若手研究者に享受し、研究課題についての議論をおこなう。</p>
-----------	---

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (日本)		
	A.	B.	
日本 〈人／人日〉	A.	19/ 169	
	B.	2	
カナダ 〈人／人日〉	A.	3/ 63	
	B.	0	
連合王国 〈人／人日〉	A.	0/ 0	
	B.	2	
アメリカ (カナダ側参加研究者) 〈人／人日〉	A.	2/ 42	
	B.	2	
台湾 (日本側参加研究者) 〈人／人日〉	A.	2/ 42	
	B.	0	
合計 〈人／人日〉	A.	26/ 316	
	B.	2	

A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）

B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナーの成果	<p>1) 下層において4000年前の縄文文化期後期に遡る文化層が確認されたことから、上層では200年前と想定されるアイヌ文化期のアワビ送り場の遺構が確認されたことにより、さらに長期的な人類居住の痕跡を調査することが可能となり、参加院生や若手研究者に多様な研究資料を提供することができた。</p> <p>2) 20名の海外院生やポスドクに加え、研究者と学生による共同調査をフィールドスクール形式で実施することによる本事業の中核的課題である国や機関の単位を越えた研究組織を構築することが可能となった。</p> <p>3) 国内外の研究者による複数指導体制により個別の大学単位では不可能な国際的な教育活動を若手研究者に対してフィールドにおいて実践することができた。</p> <p>4) 文科省の世界展開力強化事業と連携してロシアからの院生や研究者を巻き込んだ大学院生向けの教育プログラムを実施することができた。</p>		
セミナーの運営組織	<p>北海道大学の拠点メンバーを中心に調査チームを組織した。また米国、連合王国、オランダ、フィンランド、台湾の院生とポスドクによるフィールドスクールの運営組織を組織した。海外と北大の実習生は加藤、蓑島が担当し、地域社会や市民向けプログラムは岡田が担当した。</p>		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	<p>内容 国内旅費 金額 3,330,919円</p> <p>備品・消耗品購入費 金額 1,257,852円</p> <p>その他 金額 1,322,853円</p> <p>合計 5,911,624円</p>	
	(カナダ)側	<p>内容 外国旅費 備品、消耗品購入費</p>	
	(連合王国)側	<p>内容 外国旅費</p>	

整理番号	S-2		
セミナー名	<p>(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「生物人類学セミナー」</p> <p>(英文) JSPS Core-to-Core Program “Seminar on Bio-archaeology”</p>		
開催期間	平成29年1月12日～平成29年1月13日(2日間)		
開催地(国名、都市名、会場名)	<p>(和文) 連合王国、オックスフォード、オックスフォード大学</p> <p>(英文) University of Oxford, Oxford, UK.</p>		

日本側開催責任者	(和文) 石田肇・琉球大学大学院医学研究科・教授
氏名・所属・職 目的	北方圏の狩猟採集集団の生活誌復元をテーマに議論をおこなう。平成28年度のセミナーでは、ブリテン島と日本列島に生活した集団の食文化と生活様式の長期的変遷を骨に残された記録からどのように読み取るのか、その手法と課題についての意見交換を行う。また日英両国で進められている安定同位体分析による古食性の解析についての比較研究、共同研究についての意見交換を行う。上記の課題に加えて、先史人骨に基づく遺伝子マップ・プロジェクトのヨーロッパでの研究の進捗状況とアジア側のデータとの統合について相互連携について協議を行う。本セミナーには古病理学的観点、戦闘行為の痕跡についての報告も加え、幅広い視点から議論を行う予定である。
	(英文) ISHIDA Hajime, Graduate School of Medicine, University of the Ryukyus, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) Rick SHULTING, Institute of Archaeology, University of Oxford, Lecturer

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (連 合 王 国)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	8/25	
	1	
連合王国 〈人／人日〉	2/4	
	10	
合計 〈人／人日〉	10/29	
	11	

A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）

B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナーの成果	<p>本セミナーを通して以下の成果が得られた。</p> <p>1) 安定同位体分析による先史時代から中世にかけての北方圏集団の食生活の時代的変遷と地域的特性の比較を行った。</p> <p>2) 地域集団の移動や拡散行動が及ぼす文化的影響を、家畜動物を含めた北方圏の集団の食性からアジアとヨーロッパで比較することが可能となった。</p> <p>3) 気候変動の復元も含めて、歴史的な環境変化が地域集団に与えた影響をグローバルな視野から考察することが可能となった。</p> <p>4) 現在、ヨーロッパ各地で進められている先史人骨に基づく遺伝子マップ・プロジェクトのヨーロッパでの研究の進捗状況とアジア側のデータとの統合について相互連携について協議を行うことができた。</p>	
セミナーの運営組織	<p>本セミナーは、オックスフォード大学考古学研究所の Rick SHULTING 博士を中心に企画運営される。日本側からは、連携機関である琉球大学大学院の石田肇教授と北海道大学大学院医学研究科の久保大輔准教授、同じく大学院歯学研究科の森田航助教が中心となり、参加メンバーの調整と討議議題の整理を行う予定である。</p>	
開催経費 分担内容 と金額	日本側	<p>内容 外国旅費</p> <p style="text-align: right;">金額 2,437,370 円</p>
	(連合王国)側	<p>内容 国内旅費 会議開催経費</p>

整理番号	S-3
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「北方考古学の成果と課題：移動・統合・アイデンティティ」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Issues of Archaeology of the North: Migration, Integration and Identities”
開催期間	平成29年1月9日～平成29年1月13日(5日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) スウェーデン、ウプサラ、ウプサラ大学
	(英文) Sweden, Uppsala, Uppsala University
日本側開催責任者	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授

セミナー開催の目的	本セミナーは、当該事業がこれまで進めてきた北方圏の考古学・人類学的課題を北米地域と北欧地域、さらにアジア地域を比較し、当該事業の中核課題である北方圏の人類史の独自性について討議を行うものである。議論の基盤には、ウプサラ大学とアバディーン大学によるブリテン島とスカンディナヴィア半島地域における人類史の研究成果の蓄積、アバディーン大学による北米アラスカ半島での人類史と先住民集団の民族誌の研究成果の蓄積、そして北海道大学を中心とした日本列島北部における北方文化についての研究蓄積がある。これらを統合し、北方圏という広い視野から議論を行う。
氏名・所属・職	(英文) Hirofumi KATO, Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) (1) Neil PRICE, Department of Archaeology and Ancient History, Uppsala University, Professor. (2) Carl-Gösta OJARA, Department of Archaeology and Ancient History, Uppsala University, Lecturer.

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (スウェーデン)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	8 / 44	
	0	
スウェーデン 〈人／人日〉	2 / 10	
	8	
合計 〈人／人日〉	10 / 54	
	8	

A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）

B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナーの成果	<p>本セミナーから以下の成果が得られた。</p> <p>1) 先史時代に繰り返される南から北への集団移住と文化変遷の検討から得られる集団の環境適応行動の具体的な様相の提示</p> <p>2) 気候変動期に見られる大規模な集団移住とそれによる文化的統合（社会変動）がそれ以降の社会に及ぼした文化的・社会的影響</p> <p>3) 集団統合がそれ以降の民族アイデンティティの形成に及ぼした影響</p> <p>4) 信仰・儀礼体系に見られる過去の環境適応行動の記憶と神話の比較</p> <p>5) 北方圏の考古学・人類学的共通課題の抽出</p>		
セミナーの運営組織	<p>本セミナーは、スウェーデン側は Neil, Price 教授と Carl-Gösta OJARA 博士を始めとするウプサラ大学考古学部のスタッフによって企画運営された。日本側は、加藤博文とプロジェクト事務局が中心となり日本側参加者と企画内容についてのスウェーデンとの調整を行った。</p>		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容 外国旅費	金額 289,040 円
	(連合王国) 側	内容 国内旅費 会議開催経費	

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外でどのような交流（日本国内の交流を含む）を行ったか記入してください。

平成25～27年度採択課題

日数	派遣研究者		訪問先・内容			派遣先
	氏名・所属・職名	氏名・所属・職名	氏名・所属・職名	内容	内容	
9 日間	加藤博文	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・教授	Dr. Andreas Stangberg	ノルウェー、サーミ議会・文化財返還問題担当者	先住民文化遺産、先住民文化財返還等取り組みについてのヒアリングと研究交流	ノルウェー
5 日間	加藤博文	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・教授	Prof. Mika Levanto	ヘルシンキ大学・考古学部・教授	研究交流打ち合わせ及びS-1への若手研究者参加の打ち合わせ	フィンランド
2 日間	加藤博文	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・教授			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	増田隆一	北海道大学・大学院理学研究院・教授			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	江田真毅	北海道大学・総合博物館・講師			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	岡田真弓	北海道大学・創成研究機構・特任助教			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	長沼正樹	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	岩波連	北海道大学・大学院理学院・博士課程			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	石田肇	琉球大学・大学院医学研究科・教授			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	木村亮介	琉球大学・大学院医学研究科・教授			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	安達登	山梨大学・大学院医学工学総合研究部・教授			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	佐藤丈寛	金沢大学・医薬保険研究域医学系革新ゲノム情報学分野・助教			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	Mark HUDSON	静岡県・文化・観光部世界遺産センター・教授			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	鷹谷匠	京都大学・大学院理学研究科・博士研究員			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	種石悠	北海道立北方民族博物館・学芸員			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	藁島栄紀	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2 日間	森田航	北海道大学・大学院歯学研究科・助教			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス

平成25～27年度採択課題

日数	派遣研究者		訪問先・内容		派遣先	
	氏名・所属・職名	氏名・所属・職名	内容	内容		
2日間	久保大輔	北海道大学・大学院医学研究科・准教授			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
2日間	近藤祉秋	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・助教			平成28年度全体会議への参加	北海道大学東京オフィス
3日間	藤澤隆史	礼文町教育委員会 主任学芸員	加藤博文	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・教授	「社会貢献や独自の目的」のための市民講座（朝日カルチャーセンター）講演とその打ち合わせのため	北海道大学
2日間	佐藤孝雄	慶応義塾大学文学部 教授	加藤博文	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・教授	「社会貢献や独自の目的」のための市民講座（朝日カルチャーセンター）講演とその打ち合わせのため	北海道大学
2日間	吉田邦夫	東京大学総合研究博物館 特招研究員	加藤博文	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・教授	「社会貢献や独自の目的」のための市民講座（朝日カルチャーセンター）講演とその打ち合わせのため	北海道大学
1日間	米田 謙	東京大学総合研究博物館 教授	加藤博文	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・教授	「社会貢献や独自の目的」のための市民講座（朝日カルチャーセンター）講演とその打ち合わせのため	北海道大学
2日間	安達登	山梨大学・大学院医学工学総合研究部・教授	加藤博文	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・教授	「社会貢献や独自の目的」のための市民講座（朝日カルチャーセンター）講演とその打ち合わせのため	北海道大学
3日間	加藤博文	北海道大学アイヌ・先住民研究センター 教授			ヘルシンキ大学にて今後の共同研究についての研究者交流	ヘルシンキ大学
4日間	近藤祉秋	北海道大学アイヌ・先住民研究センター助教	Rane Willerslev	オーフス大学 教授	プロジェクト若手研究員（助教）オーフス大学（デンマーク）に派遣し研究交流を行う	オーフス大学
8日間	近藤祉秋	北海道大学アイヌ・先住民研究センター助教	Sarah Schroer	アバディーン大学 教授	プロジェクト若手研究員（助教）アバディーン大学（連合王国）に派遣し研究交流を行う	アバディーン大学
16日間	平澤 悠	北海道大学アイヌ・先住民研究センター 博士研究員	C. E. Holmes	アラスカ大学 教授	プロジェクト若手研究員（博士研究員）アラスカ大学（米国）に派遣し研究交流を行う	アラスカ大学
4日間	平澤 悠	北海道大学アイヌ・先住民研究センター 博士研究員	WEBER/Andrzej	University of Alberta, Department of Lab. Medicine and Pathology Professor	世界考古学会（カナダ）にて研究成果発表を行う	プリティッシュコロンビア大学
4日間	髙谷匠	京都大学・大学院理学研究科・博士研究員	WEBER/Andrzej	University of Alberta, Department of Lab. Medicine and Pathology Professor	世界考古学会（カナダ）にて研究成果発表を行う	プリティッシュコロンビア大学

7-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

平成27年度実施された中間評価では、共同研究や各セミナーについては、高い評価を受けることができたが、若手研究者の海外の国際学会での報告や論文発表の機会の創出に取り組む必要性が指摘された。この中間評価の結果を受けて、平成28年度は、研究者交流の枠内に若手研究者派遣のプログラムを新たに設け、短期（3週間以内）と長期（1ヶ月）の派遣事業を実施した。この新たな取り組みを通じて、本事業の課題である。若手研究者の研究成果の発信、海外のリーディングスカラーからの的確な研究指導を得る機会創出、研究者ネットワークの拡大に努めた。

また海外での共同講義の具体的なプログラムをスタートさせ、海外の若手研究者に対しても日本をフィールドとする研究課題の紹介、我が国の研究機関での共同研究を展開させる機会を創出した。

8. 平成28年度研究交流実績総人数・人日数

8-1 相手国との交流実績

派遣	日本	カナダ	連合王国	オランダ (連合王国側参加研究)	スウェーデン (連合王国側参加研究)	ノルウェー(第三国)	フィンランド (連合王国側参加研究)	ロシア (第三国)	アメリカ合衆国 (第三国)	デンマーク (第三国)	合計
1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	2/14 (0/0)
2	()	()	()	()	()	1/9 ()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
3	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
4	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
計	2/8 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/9 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/16 (0/0)	1/4 (0/0)	25/135 (4/23)
1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
2	3/63 ()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	3/63 (0/0)
3	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
4	(1/10)	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
計	3/63 (1/10)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	3/63 (1/10)
1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
2	(2/60)	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (2/60)
3	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
4	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
計	0/0 (2/60)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (2/60)
1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
2	2/42 ()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	2/42 (0/0)
3	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
4	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
計	2/42 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/42 (0/0)
1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
2	(1/92)	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (1/92)
3	(1/92)	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (1/92)
4	(2/39)	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (2/39)
計	0/0 (4/223)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (4/223)
1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
2	(1/22)	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (1/22)
3	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
4	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
計	0/0 (1/22)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (1/22)
1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
2	2/42 ()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	2/42 (0/0)
3	(4/22)	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (4/22)
4	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
計	2/42 (4/22)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/42 (4/22)
1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
2	(1/21)	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (1/21)
3	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
4	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)
計	0/0 (1/21)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (1/21)
1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/14 (0/0)
2	1/14 (5/135)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/5 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	7/147 (5/135)
3	0/0 (5/114)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (5/114)
4	0/0 (3/42)	2/8 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/15 (0/0)	1/4 (0/0)	25/135 (7/72)
計	1/14 (15/388)	2/8 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/9 (0/0)	5/24 (3/15)	0/0 (0/0)	1/15 (0/0)	1/4 (0/0)	55/298 (17/381)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

8-2 国内での交流実績

1	2	3	4	合計
23/47 ()	19/169 (2/26)	1/2 ()	8/18 ()	51/236 (2/26)

9. 平成28年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	4,179,149	
	外国旅費	6,769,403	
	謝金	0	
	備品・消耗品 購入費	1,257,852	
	その他の経費	2,293,596	
	不課税取引・ 非課税取引に 係る消費税	0	本学にて負担
	計	14,500,000	
業務委託手数料		1,450,000	
合 計		15,950,000	

10. 平成28年度相手国マッチングファンド使用額

相手国名	平成28年度使用額	
	現地通貨額[現地通貨単位]	日本円換算額
カナダ	12,064 [CAD]	1,000,000 円相当
連合王国	1,810 [GP]	250,000 円相当

※交流実施期間中に、相手国が本事業のために使用したマッチングファンドの金額について、現地通貨での金額、及び日本円換算額を記入してください。